

呻きのような「独り言」

考えが纏まらない。長い文章を書いて見直して見ると起承転結が全くできていない。諦めてONしようとする「ニュース」が飛び込んでくる。話題がもうひなびていると思う。下書きの話題ばかりが増えていき迷路に入る。誰にも約束した原稿ではないが、自分との戦い、どこかで適当に妥協はするが、今月は特別な混乱に襲われている。悲痛の事件が多すぎる。長い論文を諦めて何を書くべきか？悩む！

(1)知求アカデミーコンサート・祈り



世界平和と地球環境保全の祈りをこめて「農民画家ミレー生誕200年に贈る。次世代に受け継ぐ地球」

(ワールド航空サービス主催)に妻と共に参加して祈りを共にしてきました。音楽を通して世界平和を願っている人

は少なくありませんが、バイオリニスト大谷康子さん、ソプラノ歌手、森 麻季さんは特に有名ですが、今回は大谷康さんとコントラバス奏者の石川滋氏の共演、

どっしりと大地から湧き上がってくる安定したコントラバスの響きに大地に至る所に可憐に咲き誇る花々の響きを美しいバイオリンの音が和合する、安心感が湧き上がって戦いの思いはどこかに消えていく。「音楽は国境を越える力がある」との言葉が実感された一時でした。

(2)ダニエル・バレンボイムの願い

その時にイスラエルでの戦いが更に広がっていました。「何故、人類は戦争を止めないだろう」

多くの人が疑問に思うことです。このイスラエルとパレスチナの青少年を集めて指揮者ダニエル・バレンボイムとパレスチナ系の文学者エドワード・サイードが話し合って「ウエスト・イースタン・ディヴァン管弦楽団を設立したのが1999年でし



た。ダニエル・バレンボイムの願いは和解と平和の継承だと思います。市民レベルでは共存は可能であることはイスラエル（パレスチナ）に旅すれば理解できます。ある意味共存を証明していたのがイスラエル（パレスチナ）であったのです。和平の道のりは遠く時間がかかります。唯一の方法は教育です。バレンボイムもこの対立するものを若い人に期待して音楽を通してその近道を模索しているように感じます。私は2011年5月20日ウイーンの楽友協会で「ベートーヴェンの第三・英雄」を聴き深く感動したことを今でも覚えています。（詳細はベストピア第291号参照）

ニューヨークの国連本部にある記念碑に刻まれている聖句があります。「**彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない**」

国際連合の創始者の願いです。（イザヤ書2章4節ですが、第2章の始めの言葉は終末の平和です）

私も1994年3月31日エルサレムのヘブライ大学植物園に「平和を願う・念ずれば花ひらく」の碑を建てましたが、この世では省みられることはないようです。

「にもかかわらず」希望を持つことを諦めません。

(3)マレーシア航空の惨事

戦争は多くの場合、誤射であれ、民間人の犠牲で始まっています。犠牲になった方々、家族の方々には慰めの言葉がありません。どんな決着に導かれるのでしょうか？戦争の愚かさに気づく以外に犠牲者を慰めることはありません。市民レベルでは謝罪の意識が現れているようです。7月21日の朝日新聞の記事から紹介します。

マレーシア航空機撃墜の責任をめぐってロシアと米国やウクライナが激しく対立するなか、モスクワのマレーシア大使館やオランダ大使館では、犠牲者を悼んで花を供えるロシアの人たちの姿が絶えない。193人と最多の犠牲を出したオランダの大使館があるモスクワ中心部の通りは、市民が供えた花やろうそくで埋め尽くされていた。子供の犠牲が多かったため、ぬいぐるみやおもちゃも置かれている。「私たちを許してください」「戦争はやめて」などのメッセージが書かれたカードも置かれている。

こうした様子は、ロシアのテレビなどではほとんど報じられていない。



モスクワのオランダ大使館前に供えられた花とぬいぐるみ＝19日、駒木明義撮影 

(4) どうしたら戦争を止められるのだろうか？

「何故、人類は戦争をやめないのか？」難しい哲学的な論議でなく簡単な言葉で普通の人に分かる言葉で、この問いを持ち続け、答えを求め続けるのが最後の使命ではないかと思うようになりました。現実を見る限りは不可能でしょう。人類が滅びる前に、答えが出ることを期待したいですが、7月20日の朝日新聞「声」の欄に保育士の方が「3歳でも分かる・暴力はいけない」の記事があり同感しました。私が懇意にしている小部保育園でも同様の幼児教育がなされています。幼児教育の大切さを両親が知っていただきたいです。学校教育の歴史では国の政策が入ってきますから「三つ子の魂百まで」を信じて「暴力と戦争はしてはならない」と躰けることしかないとは私は考えています。

保育士 奥原千夏（神奈川県 47）

20年以上の保育士としての経験から、3歳になる子どもたちに、けんかのとき伝え続けていることがある。

幼児は自分の思いが爆発すると、感情を抑えきれず、思わず持っていた玩具で友だちをたたいてしまいそうになることがある。けがの危険もあるので、とっさに玩具を取り上げる。それから「たたいてはいけない」と、相手を傷つけること自体が許されないことをしっかりと伝えるのだ。

そして、双方の言い分をとことん聞く。すると3歳といえども、けんか相手の思いが分かり、穏便な解決が出来るのだ。平行線で終わることがあっても、「武力行使」を許すことは決してない。

保育の世界では「人間同士は話せば伝わる」という揺るぎない態度で、幼子に接している。「理由によっては武器を使ってもいい」なんて、教えることはできない。大人だったら特別に許される？ そんなことはありえない。手塩にかけた子どもたちが、将来、正義の名のもとに戦場にかりだされるなどということも、断じて許すことはできない。

(5) いのちの歌とミレーの「春」

知求アカデミーコンサートのテーマに戻ります。

「次世代に受け継ぐ地球」の企画者、青木記代美さんは信仰をもって、芸術・文化・歴史の真髄を探究し、総合芸術として表現することを得意とされ活躍されておられる方です。最後の締めくくりの言葉に感動しました。地球の英訳はEARTHです。はじめのEはeden(大地と訳された)です。最後のHはheaven(天国)です。はじめのEと最後のHをつなぐのはART(芸術)です。

アートは虹です。ミレーの春が映し出され全員大喝采でした。平和な一時に感謝して紀尾井ホールを後にしました。

